

発行:(財)日本フィルハーモニー交響楽団 〒166-0011 東京都杉並区梅里 1-6-1 TEL 03-5378-6311 FAX 03-5378-6161

南相馬市民文化会館「ゆめはっと」でヴィヴァルディ「四季」 1000人の方が、弦楽合奏を堪能しました。

10月25日少し大きな編成で南相馬市原町のホール「ゆめはっと」を訪れました。

南相馬市は津波と原発被害の2重の被災を受けた地域です。町の1/3の地域から市民が撤退し、1年半たった現在も多くの人々が目に見えない放射能との闘いと生活再建がままならない不安の中で暮らしています。南相馬市は日本フィルが本拠を置く杉並区と「災害時相互援助協定」を結んでおり、最近では、3月に中学校4校の吹奏楽部生に対し、クリニックと合同演奏を行ってきました。震災直後、町内各地区には高い放射線量で特定避難勧奨地点に指定され、未だに除染活動が進まない為、多くの方が福島県外に避難されています。しかし、最近では比較的線量が低くなっているため、帰宅した住民も増えているとのことです。

南相馬市民文化会館(ゆめはっと)は震災後避難所となり、自衛隊の司令部になったホールです。今年に入り、やっと活動を再開し、市民に希望を届けることのできるコンサートが行われるようになり、日本フィルからの「被災地支援」コンサートの申し入れを、大きな期待をもって準備してくださいました。コンサートは13人編成の弦楽合奏で、メインプログラムはヴィヴァルディ「四季」。ヴァイオリンの独奏はソロコンサートマスターの木野雅之です。アイネ・クライネ・ナハト・ムジークやパッヘルベル：カノン、ロンドンデリーの歌など、豊かな弦の響きを堪能しました。

入場時には、弦楽四重奏による welcome の演奏もプレゼントしました。演奏の最中に震度4の地震があり、びっくりしましたが、全員おじけることなく最後まで演奏しました。「まだ、ひんぱんに余震がありますよ。」というホールの方の言葉に、この地域に暮らす人たちの消えることのない不安を実感しました。「耳なじみのあるプログラムが聴けて嬉しい」「四季全曲を聴くことができてよかった」「当地で一流の音楽を聴くことができて幸せ」「木野さんのお人柄がうかがえた」「一時日常を忘れることができた」などの感想をいただきました。終演後は翌日の三春での公演にむけ、全員バスで郡山まで2時間かけて移動です。



翌日、26日、三春小学校は、昨年6月に日本フィル「被災地支援」活動の一環として弦楽四重奏で訪問しました。その後3月にはマイク・スペンサーとともに「四季」をテーマにしたワークショップを行っており、今回の訪問で3回目の出会いとなる日本フィルとは、なじみの深い学校となりました。教頭先生はじめ、たくさんの教員と子どもたちが期待に胸ふくらませ、待っててくれました。三春小学校には弦楽合奏部があり、【世界がひとつになるまで】と校歌の2曲と一緒に演奏しました。1年生から6年生まで元気に大きな声で歌ってくれました。「右に日本フィルの人がいると思うときんちょうしてうまくひけませんでした。でもがんばりました。最後に握手したとき、心臓が止まりそうでした」「一番はじめの曲がはじまったしゅんかんに、とりはだがたつくらいすごかったです」「演奏を見ると迫力があって、それに音の大きさの調整によって印象が変わって聞こえてすごいです」と感想を寄せてくれました。



東京→南相馬→郡山→三春→いわき→東京 走行距離1000kmを走った弦楽四重奏キャラバン隊



「ゆめはっと」でのコンサートに先立ち、ヴァイオリン大貫聖子、加藤祐一、ヴィオラ高橋智史、チェロ山田智樹の弦楽四重奏組は24日に、南相馬市立鹿島小学校へ行きました。この学校には原発避難地域の小高中学校と福原小学校、津波被害地域からの真野小学校の3校が同居しています。4つの学校がひしめきあい400人から100人へと生徒が減った小高中学校はプレハブ校舎が運動場に建っていました。運動場も体育館の利用も全部のクラスがパズルのようにして使っているとのことでした。4人の校長先生が調整しあって、体育館で合同コンサートを開いてくださいました。

体育館には4種類の制服を着た子供たち450人が座っています。福島出身の山田の司会でモーツァルト：ディベルティメントやヴィヴァルディ：四季より春、会津磐梯山などが演奏され、途中「この曲あてクイズ」にもたくさんの子どもが手を挙げていました。最後に小高中学生徒会長が「震災や原発事故のことが風化されてしまうのではないかと不安を感じている私たちにとって、このように気にかけてくださる方がいるということは何よりの心の励みになります。これからも厳しい環境ではありますが、頑張っていきます」と挨拶しました。東京にいと実感できない環境で暮らしている私たちにとって、この言葉は強く胸に響きました。「この子どもたちは、ほとんどが仮設住まい。大抵家族がバラバラで、母と子、あるいは祖父母と子の状態で暮らしている。部活もなくなり、今の環境に慣れてきているが、心に抱えているストレスは大きい」との校長先生の話に、大人の責任を強く感じました。



この日の夜、急きょ「農家民宿」を開こうとしている大きな古い民家の星さんのお宅で30人位のコンサートを行いました。近隣の方や新潟県小千谷から福島に支援に来ているNPO団体の方々と、手作りの食事をごちそうになりながら夜遅くまで交流しました。